

## 私の保育

私が最初に出会った子ども達は、知恵の遅れた子ども達でした。それは、高校時代の宗教的使命感が、このような子ども達の目の前に、私をたたせたからです。

しばらく大学で、知恵の遅れた子ども達と過しているうちに、「知恵遅れの子とも達ばかりと接していると、子どもを見る目がかたわになるよ」と先輩から忠告され、それもある程と思い、近くの保育園へ出かけ、普通の子とも達とも接するようになりました。それから半年ばかり、知恵の遅れた子ども達と、普通？の子とも達と、並行して接していましたが、そのうち、何かわりきれないものを、段々と感



小林暉親

じるようになりました。

それは「何故、知恵の遅れた子ども達と、普通の子とも達と、分けて保育しなければいけないのか」という疑問なのです。どちらも天真爛漫で、とてもかわいいのです。皆、こちらが気持を豊かにして接すれば、豊かに応じてくれるのです。どの子どもにも、それぞれの個性があつて、楽しいのです。そこには理屈はありません。なのに、どうして、知恵遅れと普通児という風に分けて保育がされているのでしょうか。お互いの園の交流すらないのです。本当に別々に保育する事が子どもの為になるのでしょうか。

その辺の解決がつかないまま、施設実習の時期を迎え、実習生として、愛育研究所の家庭指導グループで、お世話になる事になりました。実習生という事で、知恵の遅れた子ども達の指導法でも教えて下さるのだろうと、期待を持って最初に津守先生にお会いしました。すると先生は一冊の本を出して、「これを読んできて下さい」と言われました。それは、K・H・リード著「幼稚園」（フレーベル館）という本でした。

私は、その知恵遅れの子どもとは一見、何の関係もなさそうな「幼稚園」の本を手に取り、仕方なく読み始めました。しかし、読み始めて驚いた事に、そこに最初に書かれている事は、知恵遅れの子どもの事でも、普通の子どもの事でもなく、私自身の事でした。つまり「大事なものはあなた（私）自身なのであって、あなた（私）自身がどんな人間で、どんな態度で子ども目の前に立とうとしているのか、それを見つめなおさない」という事でした。私がそれまで学んできた事は皆、知恵の遅れた子ども達のことについてであり、普通の子ども達の発達と保育課題についてでした。でも、そこには「問題は、保育者であるあなた自身なのであって、あなたがあなた自身について何を学んでは

るのか、という事である」と、鋭く指摘しているのです。

私がこれまで学んできた、正常な発達とは、異常な発達とは医学的にはどうだ等々は、確かに大事な事であり、現在、私が子ども達と接する上で、とても役に立っています。しかし、それらの知識は、知恵の遅れた子ども達と、普通の子ども達との区別の仕方を教えてはくれませんが、「同じ子どもなのだ」という事は、教えてくれませんでした。そこに、私の疑問があり、悩みがあったわけです。K・H・リードと津守先生が、「問題は、子どもではなく、あなたの気持なのです」と教えて下さったのです。私はそこで始めて、何故、多くの場所で、知恵の遅れた子ども達と、普通の子ども達と分けて保育されているのかに気がきました。つまり、問題は、子ども自身なのではなく、子どもをとりまいている大人の側の問題なのだ、という事に。私は今でも、この本に出合った事と、この本を紹介し、実際に指導して下さった愛研の先生方に感謝しております。

そこから、私の子ども達に接する一つの考え方の基本が形作られてきました。それは、知恵の遅れがあるかないか

の問題は、子どもの側の問題だけではなく、私を含めて、子どもをとりまく大人の側の問題でもあり、その大人の側の問題にも、保育者が自分自身の事も含めて取り組まない限り、子どもの保育は完全には保障されないのだ。つまり、子どもを育てようとしている親や保育者が、どんなに子どもに遅れがあろうとも、その遅れを少しも問題にしなければ、その遅れは何の問題にもならないのであり、逆に、客観的に見ても、遅れがないにもかかわらず、親や保育者が、「この子は問題児なのだ」とすれば、そこに問題が存在してしまうのだ、という事です。

従って、子どもの成長の中で、子どもが育っているという事が、何の問題もなければ、その子どもはそれだけで健全に、かつ健康に育っているものであり、逆に、少しでも大人が問題を作りあげていけば、その子どもは不健全な、かつ不健康な状態におかれてしまうのです。そこで、真の保育者は、保育者の役割の一つとして、子どもをとりまいている問題を、必要以上に問題視している大人がいるならば、その大人を含めて保育する事が、子ども達を健全に、かつ健康に育てる事になるのではないだろうか、と考えるべきではないでしょうか。

今私は、市立による「親子教室」の指導員をしております。この親子教室は、〇歳から学齢までの、何らかの障害があると思われる子ども達とその親が、通ってきております。ここでは仮に、その子どもに何らの障害がないとしても、もし親の気持のうちに「うちの子どもは障害児ではないかしら」という悩みの心があるならば、「通ってきたら如何ですか」と勧めています。

無論、普通児集団の保母さんや先生方の中で、担当している子どもについて問題をかかえた場合、親子教室へ送ってくる事もあります。つまり、親子教室へ通う規準は、親と保育者にあるわけです。そして親や保育者が、この親子教室へ親子で通う（通わせる）事によって、親自身の気持が整理され、又保育者も、他の子ども達と分け隔てなく、その子どもを気持の上で受け入れる事ができるようになったら、もういつでも親子教室を卒業してもいい、という状態になるわけです。ですから早い親子は、数か月で卒園という事もありうるわけです。

今、親子教室では、一日中皆そろって笑いこけていま

す。職員と父兄とがいつも冗談を言い合ったり、からかったりして楽しんでおります。初めは、そんな雰囲気仲間々溶け込めなかつた親達も、いつのまにか今では一番よく笑うようになったりしています。それは子どもの遅れ等の問題が解決した為ではありません。ただお母さん方の気持の中で、自分の子どもをあるがままに受け入れられるようになったお母さん程よく笑い、まだまだ躰が気になり、近所の子どもが気になり、将来が気になるお母さん程、無口で大人しい人として存在しています。でも段々と、そのようなお母さんも、笑いの中に引き込まれていくようです。

そんな中で、子ども達はどうなのかといいますと、初めのうちは、この子は親を認知しているのかしら、と思う程のお子さんでも、この頃、親達があまり楽しそうにしているせいか親を大分意識して、親から離れなくなり、おんぶやだっこをせがむ子がとても増えてきました。そのような子ども達に対し、初めの頃、お母さん方は、子ども達が赤ん坊になるみたいで、躰ができないのでは、と心配していました。この頃は、内心嬉しいのか、自分の子ども達が甘えてくると楽しそうに、おんぶやだっこをしてくれるようになってきました。

そして何より感心するのは、お母さん方の子どもに対するつきあい方が上手になり、遊びでも、親子で楽しそうに遊べるようになってきた事です。今まではスカートで登園し、親子が別々に保育室の中にいるようだったのが、最近では、お母さんもズボンなどの動きやすい服装をしてきて、保育室の中で親子一緒に遊ぶ光景が増えてきたのです。つい二、三か月前までは、子どもと一緒に居ても、遊んでいても、障害の事、躰が思うようにできない事、将来の事等が気になって、まるで他人同志が隣にいるみたいでしたが、最近では、子どもと一緒に楽しく笑い合うようになったのです。そこには、保育者が入り込む余地のない程、親子の心の触れ合いがあるのです。そしてこんな光景、こんな親子が少しずつ増えてきたのです。

ここまでくると保育者（私）の仕事はあと少しです。それは全員がこのようなお母さんになってもらう事と、こうして親の問題から解き離れた子ども達を同じ仲間として受け入れてくれる、より適切な集団をみつめて、そこに送ってあげる事です。

これが私の保育であり、役割だと思っております。

（八千代市立親子教室）